

に思われる。彼は Sam の物語には二つの解釈が可能であると認め、この「根本的な割り切れなさ」“a fundamental undecidability”は、Quentin が物語の真の内容を理解するのを避けるために用いた一種の戦略であるとしている。この Matthews の解釈は、いくつかの短編の全体の語り手である Quentin は、枠組みの部分で内側の物語の内容を曖昧化し、真実と直面することを避けようとしている、という彼の主張の一例として述べられたものである。全体として Matthews の議論は非常に刺激的であり、十分説得力を持っている。ただし、“A Justice”に関する部分には、多少の不満がある。そのひとつは Matthews が全体の語り手 Quentin に議論を集中するあまり、語り手としての Sam のあり方を全く問題としていない点である。

- 6) これまでの批評はこの問題をかなり単純に考えてきたように思われる。たとえば Elmo Howells は、先に触れたように Sam は自分の父が Doom であると知っていたとした上で、Sam はその事実を誇りを抱いていたと考えている。M. E. Bradford も同様である。だが、Bradford は、出生の事情から生じた Sam の人生の困難にも言及し、それを Doom が家父長制の原則を破ったことの結果だとしている。一方、John T. Matthews は、Sam は明らかに Crawford を自分の父としていると簡単に言い切っている。

ら、しかし完全にひたりきることはできず、その世界の限界を同時に思い知らされているのである。ここには、自分のルーツを思い起こしながら、しかもそのルーツから距離を取るように物語をしていた Sam が味わっていたのと同じせつなさがある。拒否しなければならないとわかっているものに、しかしどうしてもなくあこがれること。この禁じられたノスタルジアこそ、この短編のエッセンスであり、この短編の複雑な構成が表現しようとしていたものだったのである。

注

- 1) William Faulkner, *Collected Storeis of William Faulkner* (New York: Random House, 1950), 359. 以下作品からの引用はすべてこの版により、ページ数はカッコ内に注記する。
- 2) John T. Matthews は Sam の物語が Quentin に与えた影響について次のように言っている。“Doom’s willingness to recognize two fathers for one child strikes at the very heart of patriarchal practice. Doom’s decree announces that biological and social paternity may be a social function as much as a natural fact. Such an insight would have profound consequences for Quentin....” ただし、厳密に言えば、Quentin が動揺するのは Doom が “Had-Two-Fathers” という名前を与えた箇所ではなく、私が指摘した「考えオチ」の箇所を聞いてからである。John T. Matthews, “Faulkner and Narrative Frames.” In *Faulkner and the Craft of Fiction: Faulkner and Yoknapatawpha*, 1987. Eds. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: University Press of Mississippi, 1989. 71 – 91.
- 3) Elmo Howell, 1967. “Sam Fathers: A Note on Faulkner’s ‘A Justice.’” *Tennessee Studies in Literature* 12: 149 – 53. M. E. Bradford, 1974. “That Other Patriarchy: Observations on Faulkner’s ‘A Justice.’” *Modern Age* 18: 266 – 71. Lewis M. Dabney, *The Indians of Yoknapatawpha: A study in Literature and History*. Baton Rouge: Louisiana State University, 1974.
- 4) Diane Brown Jones, *Reader’s Guide to the Short Stories of William Faulkner* (Boston: G. K. Hall, 1994), 348.
- 5) John T. Matthews も上記論文において同じような考え方をしているよう

だが、そのイメージには明らかに「死」の影がある。だとすれば、ここで12歳のQuentinはSamの死を先取りし、その喪失の悲しみをいわば予感として経験していると言えるであろう。言い換えれば、ここで12歳のQuentinは、自分がいつかSamが話してくれた物語を理解するにしても、そのときにはもはや手遅れであることを予感し、その悲しみを先取りして感じている。そしてそのとき、12歳のQuentinにとってSamは失われた過去というものの象徴となったのである。

そして、その思いは大人になったQuentinによっても共有されている。それは、“Then I knew that I would know. But then Sam Fathers would be dead.”という箇所において二度繰り返されている“Then”“then”が、12歳のQuentinにとっては未来であるが、これを語っている大人のQuentinにとっては過去であることに対応している。ここには、失われた過去の象徴であるSamに対する12歳のQuentinと大人になったQuentinとの思いがひとつに重ね合わされているのである。

だが、大人になったQuentinが感じているのは、今は亡きSamへの思いだけではない。彼が感じているのは、Samや祖父に代表される子供時代全体へのノスタルジアなのである。無論、大人となったQuentinは12歳の頃に戻ることはできない。そのことへの嘆きが、おそらく彼がここで感じているノスタルジアの源である。だが、その反面、彼は自分が子供の頃の世界に戻ってはいけないことを知っている。なぜなら、Samの話を聞いたときから現在までのどこかで、彼はSamの物語の裏側に潜む複雑な思いを理解したはずだからである。そしてそのことは、Quentinが子供の頃の世界に訣別する上で、決定的な役割を果たしたと考えてもいいであろう。だからこそ、彼は今この物語を思い出し語ったのである。

そして、子供時代に訣別を迫ったこのような認識こそ、Samのもとから逃げるように立ち去った12歳のQuentinが予感したことであった。“that strange, faintly sinister suspension of twilight”とは、いつまでもとどまってはられないとわかってしまった子供時代の鮮やかなイメージである。しかし、その記憶はまた、大人になったQuentinに子供時代へのノスタルジアを呼び起こすものでもあった。つまり、ここでQuentinは子供のころに生きていた世界へのノスタルジアにひとりなが

をすべて理解していたわけではない。だが彼は深く揺さぶられており、そのことは自分の世界が危うくされているのを彼が直観していたことを示している。

振り返れば、そもそもこの短編は“Until Grandfather died,”という言葉で始まっていた。言うまでもなく、そこにはかつて信じ切っていた祖父への追憶がある。だがそれはたとえば「お祖父さんが生きていた頃は」という始め方とは違う。それはこれから語ることが過去のある時に完全に終わってしまったことを意識した言い方である。つまりこの始め方には、大人になった Quentin のとりかえすことのできない子供時代へのノスタルジアが既に込められていたのである。

そして、消えさってしまったのは祖父だけではない。この日12歳の Quentin を深く揺さぶった Sam もまた、Quentin の思い出の中以外にはもはや存在しない。そしてそのことを、12歳の Quentin はすでに予感していたのである。そのことは、この短編の最後に鮮やかなイメージで語られている。

We went on, in that strange, faintly sinister suspension of twilight in which I believed that I could still see Sam Fathers back there, sitting on his wooden block, definite, immobile, and complete, like something looked upon after a long time in a preservative bath in a museum. That was it. I was just twelve then, and I would have to wait until I had passed on and through and beyond the suspension of twilight. Then I knew that I would know. But then Sam Fathers would be dead. (360)

ここで重要なのは、「長い時間が経ってから見物されるために博物館の防腐槽の中に保存されているなにか」という Sam のイメージである。Sam がこの日話したのは自らの出生に関わる昔話であり、その意味で Sam が過去を伝える存在として描かれるのは不思議ではない。「長い時間が経ってから見物されるために博物館の防腐槽の中に保存されているなにか」というイメージは、12歳の Quentin の自然な連想だったのであろう。

Jason in the back. Grandfather and Roskus would talk, with the horses going fast, because it was the best team in the county. They would carry the surrey fast along the levels and up some of the hills even. But this was in north Mississippi, and on some of the hills Roskus and I could smell Grand-father's cigar.

The farm was four miles away. There was a long, low house in the grove, not painted but kept whole and sound by a clever carpenter from the quarters named Sam Fathers, and behind it the barns and smokehouses, and further still, the quarters themselves, also kept whole and sound by Sam Fathers. (343)

この部分はこの短編の冒頭であり、後で引用する結末部分とともに Sam の物語の額縁を構成している部分である。無論これを語っているのは大人になった Quentin であるが、この部分は明らかにまだ 12 歳だった Quentin の文体で書かれている。リズムカルで平明な文体は子供の頃の Quentin の安定した世界をそのまま反映している。とりわけ特徴的なのは第 2 段落での農場の描写である。それは実に秩序だった空間として把握されている。まず白人の manager の住む家があり、その後ろには納屋や燻製を作る小屋があり、最後にその奥に黒人達が住むところがある。ここでは単に空間が近くから遠くへと捉えられているだけではない。まず白人がいてその陰に黒人がいるという階級的な世界観がそのまま反映されているのである。それは人種によって地位が完全に定められてしまう社会である。

そして、そのような社会のいわば秩序の源泉が、祖父であった。急な坂を登る馬車の中で後ろの席から漂ってきた葉巻の香は、子供の頃の Quentin を包んでいた祖父の存在の見事な表現となっている。

このように見てくると、この日 Sam の話して聞かせた物語がいかに Quentin を揺さぶったか、想像するのは容易であろう。繰り返せば、Sam の物語は秩序の源泉である祖父と Quentin との絆を疑わしいものとし、またその世界の秩序の根幹である人種が恣意的なものにすぎない可能性を垣間見させたのである。無論 12 歳の Quentin は Sam の語った内容

owned all the land that I knew of until I was grown. He was a Choctaw chief. He sold my mammy to your great-grandpappy. He said I didn't have to go unless I wanted to, because I was a warrior too then. He was the one who named me Had-two-Fathers."

"Had-Two Fathers?" I said. "That's not a name. That's not anything."

"It was my name once. Listen." (344-5)

細かい注釈は不要であろう。自分のルーツである名前へのこだわり。切っても切れない関係にある族長 Doom。すべてのきっかけとなった奴隷制度。黒人たち。そして母の記憶。Doom が母を売り飛ばしたこと。その母についていった自分の決断。Sam が繰り返す "I remember" という言葉には、千鈞の重みがある。ここには彼の人生が凝縮されているのである。

以上、語り手としての Sam の思いに焦点を当てながら、その物語を再検討してきた。ユーモラスで淡々とした口調の裏にどのような思いが秘められていたか、ほぼ明らかにすることができたように思われる。そこで、今度は Sam から Quentin に目を転じ、残された外側の入れ子構造を検討することで小論の結びとしたい。

4

12歳の Quentin が生きていた世界は、この短編の冒頭に余すところなく描かれている。

Until Grandfather died, we would go out to the farm every Saturday afternoon. We would leave home right after dinner in the surrency, I in front with Roskus, and Grandfather and Caddy and

いているのである。言い換えれば、彼は自分の語る物語を自分のものだと認めておらず、あくまで Herman のものだと見なしているのである。そしてそれは、その物語の割り切れない曖昧さへの Sam の態度の現れであると同時に、父であるとされる Crawford や実の父であるかもしれない Doom に対する彼の態度の表明でもある。すでに見てきた Doom や Crawford の在り方を考えれば、Sam のこの気持ちはきわめて自然なものである。

それゆえ、彼が Crawford を “my pappy” と呼ぶとき、あるいは彼が “That was the kind of a man that Doom was” という Herman の言葉を引用するとき、そこには苦いアイロニーがある。だが、それにも関わらず、彼はこの物語を語り続けてきた。なぜなら、たとえ Doom や Crawford が冷酷で狡猾な卑劣漢であり、いずれも誇りをもって「父」と呼べるような存在でなかったにせよ、彼のルーツは他にはありえないからである。しかも、彼は一族の最後の生き残りであり、もはや彼のルーツは彼の語る物語の中にしか存在しない。ここには、父たりえなかった父に対する息子の嘆きと、それでもその父を求めざるをえない悲しみがある。彼のユーモラスな口調や淡々とした調子は、その悲嘆を和らげ、そこから距離を取らせてくれるものだったのである。

このように見てくると、Sam が Quentin にこの物語を始めるきっかけとなったやりとりには、深い意味が秘められていたことがわかる。少し長くなるが、やはり引用したい。

“These niggers,” he said. “They call me Uncle Blue-Gum. And the white folks, they call me Sam Fathers.”

“Isn’t that your name?” I said.

“No. Not in the old days. I remember. I remember how I never saw but one white man until I was a boy as big as you are.... It was the Man himself that named me. He didn’t name me Sam Fathers, though.”

“The Man?” I said.

“He owned the Plantaion, the Negroes, my mammy too. He

あろうか。

しかも、ここにはさらに複雑な問題がある。というのは、Sam はだれを自分の父だと考えていたかという問題である。⁶⁾ もちろん、Sam は一貫して Crawford を“(my) pappy”と呼んでいる。だが、Doom が彼の父であることを示唆するいくつかの事実に、語り手である Sam が全く気がつかないできたというのは、やはり不自然であろう。そして、もし Sam が Doomこそ自分の父であると考えていたとすれば、彼の語りはきわめて複雑なものになる。すなわち、Sam は Crawford を“my pappy”と呼び、その欲望のアイロニカルな顛末を語りながら、自分の本当の父が自分を見捨てるまでの物語を、淡々とユーモラスに語っていたことになるのである。

だが、先に述べたように、Sam の語る物語の中には Doom が彼の父であることを示す状況証拠はあっても、決定的な証拠はない。それゆえ、ここで Sam は割り切れない曖昧さというものに直面しているのである。そしてこの曖昧さは、彼のアイデンティティに直結するものである以上、Sam にとってつらく、耐え難いものであったはずである。その耐え難さは、実は Sam の語りの中に痕跡をとどめている。

私が言っているのは、Sam が繰り返し言及する Herman Basket の存在である。Sam は彼の物語全体を自分が Herman から聞いたこととして語っている。だが、もしこの物語が Sam の十八番であり、すでに何度も繰り返し語ってきたものであるなら、Sam はすべてを自分の言葉で語ることもできたはずである。もちろん、自身の誕生をめぐる物語である以上、直接見聞いたこととして話すのは不自然である。だが、それにしても、これほど Herman の言葉を直接引用する形で語る必要はないはずである。にもかかわらず、Sam はくどいほどこれは Herman が語ったことだと繰り返す。実際、Sam の物語の冒頭“This is how Herman Basket told it”から最後のオチの部分に至るまで、語り手としての Herman の存在は全部で 88 回言及されている。これは 1 ページ平均 6 回弱という数字であり、非常に多いと言ってもいいであろう。では、なぜ Sam はこれほどまで自分の語りは Herman の引用であると強調するのであろうか。

答えは明らかであろう。Sam は自分の語る物語から意図的に距離を置

る試みである。

3

既に何度も述べたように、Sam の物語は彼の出生の経緯に関わるものであった。それは Native American と黒人の混血である彼にとって、きわめて重大な意味を持つ物語である。もっとも、それは彼がまだ小さな子供だったころに、Herman Basket から聞かされたものである。とすれば、12 歳の Quentin 同様、彼が当時その内容をよく理解できなかったことは想像に難くない。だが、それは疑いなく忘れられない印象を残した。100 歳近くになりながら、彼がなお Quentin にこの物語を話して聞かせるのはそのためである。

一方、Sam がここで 12 歳の Quentin に語る物語が、子供の頃 Herman Basket から聞いたものとまったく同じということも、やはり考えられない。そもそも、いかに印象的であったとしても、ごく幼い頃に聞かされた物語を 100 歳近くになってから忠実に再現することは不可能である。だが、Sam が Quentin に聞かせる物語が、彼がもともと聞いたものとは違うと考えるべき理由はまだある。なによりも、ここで Sam が話す物語は、聞き手を意識して巧みに造られたものである。また、それを語る Sam の口調は淀みなく、そのユーモアは語り手の余裕を十分に感じさせる。こういったことからすると、Sam がこの物語をするのはこれが初めてとは思われない。それどころか、これは Sam の十八番だったように思われる。だとすれば、このとき Sam は Quentin にお得意の物語を聞かせ、少し驚かせてやろうとでもしていたのであろうか。

だが、繰り返すが、この物語は Sam 自身の出生についての物語であり、いわば彼のアイデンティティそのものが関わる物語である。しかも、その中で彼が “my pappy” と呼ぶ Crawford の姿は、とても息子が喜んで話せるようなものではない。だがそのような父の物語を Sam はユーモラスにまた淡々と話して聞かせる。この矛盾をわれわれはどう考えればいいで

これはブラックユーモアとしか呼べないような行為であろう。ここにはほとんど残酷なユーモアがある。

さらに、このことは Crawford と黒人の夫についてのわれわれの理解も変えてしまう。Crawford は確かに Sam の母に執着し、彼女を我がものにしようと執拗な企てを続けたのであるが、Sam が生まれたとき彼は自分が父親でないことはわかったはずである。にもかかわらず、彼は Sam の父であることを否定するどころかその罰まで甘受する。その理由はひとつしか考えられない。つまり Doom が怖かったのである。Doom が子供の頃から幼なじみの Crawford や Herman Basket を虐めていたことは何度も言及されている。また、族長の座を奪うべく故郷に帰ってきた Doom はやはり幼なじみのふたりに協力を求めるが、それにもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、族長となった Doom は Crawford に対し冷淡であった。これらを考えあわせると、Crawford が自分も Doom に殺されてしまうのではないかと恐れる理由は十分にあったと言えるであろう。その結果、Crawford は横恋慕した人妻をいわば先に寝取られ、しかもその責任をとらされたことになる。これは Doom の冷酷さの一例であり、やはりブラックユーモア的なアイロニーに満ちている。ちなみに彼の名前 Crawford は “Crawfish-ford” の略だとされているが、実は “crawfish” には名詞で「しりごみする人」、動詞で「しりごみする、手を引く」という意味がある。これはいかにも彼にふさわしい名前であろう。

一方、黒人の夫は妻を Crawford の手から守るために懸命の努力をしており、その姿はこの物語中センチメンタルなペーススの源となっている。だが、追いつめられた彼が助けを求めるのは、いつも自らの主人である Doom であり、実はその Doomこそ彼の妻を寝取った張本人だったのである。これはもうブラックユーモアといって片づけられないほど残酷な設定であり、センチメンタルな同情など吹き飛ばしてしまうほど痛烈なアイロニーである。

以上、Doomこそ Sam の父親であると考えた場合、“A Justice” の内容がどのように変わるか考察してきた。以下では、いよいよ語り手である Sam に焦点を当て、この作品の複雑な内容についてさらに考えてゆきたい。それは冒頭に述べたように、この短編の内側の入れ子構造の意味を探

このように、この問題はまだ決着が付いておらず、いわば曖昧なまま放置されてきているのであるが、これまでの議論を整理し、わからないことはわからないと率直に認めれば、次のような結論が得られるであろう。

すなわち、“A Justice”の中には Doom が Sam の父であることを示す決定的な証拠は存在しないが、有力な状況証拠は確かに存在するのである。具体的に述べると、まず *Go Down, Moses* などにおける記述を根拠に、Doom が Sam の父であると主張するのは無理である。それは作品の自律性というものを、あまりにも無視している。他方、有力な状況証拠として挙げられるのは、ひとつは Doom が Sam の母を Quentin の曾祖父に売り渡したとき、Sam が望めば一族のもとに残ってもいいと言ったことである。もうひとつは、Doom が Sam の母を連れて故郷に戻ってから Sam が生まれるまで、約7ヶ月しか経っておらず、にもかかわらず、Sam の誕生を聞いた Doom が「もうそろそろだと思った」と言っていることである。これらは Bradford が挙げている四つの理由のなかの二つであるが、決定的とは言えないまでも、相当有力な状況証拠であると言ってもいいのではないだろうか。

これを別の角度から言い直すと、要するに Faulkner は Sam が Doom の子供であると想定はできるが、断定はできないように書いているのである。われわれ読者は、その曖昧さをそのままに受け入れなければならない。というのも、この曖昧さは読者だけではなく、語り手である Quentin、そしてそれ以上に Sam も直面しているものであり、後に見るようにこの作品の本質的な意味とかわるものなのである。⁵⁾ だが、それを理解するためには、もし本当に Doom が Sam の父親であったとすれば、Sam の物語がどのような意味を持つようになるかを、まず理解しなければならない。

Doom が Sam の父であれば、“Had-Two-Fathers”という奇妙な名の由来は、一層深刻な意味を持つことになる。すなわち、ここで言う「ふたりの父」は、Crawford と黒人の夫ではなく、Crawford と Doom 自身を指すことになる。しかも、その名を与えたのは他でもない Doom であった。すると、自らの子にそのような奇妙な名を与えることで、Doom は自分が父親であることを隠蔽しながら、実は密かに認知していたことになる。

Sam の物語に現れる Doom は権勢欲にとりつかれた残忍で冷酷な人物であり、Sam の語りに潜む暗い影の主な原因となっている。

また、Doom は Sam の誕生にも深く関わっている。そもそも Sam の母は Doom がニューオーリンズから連れ帰ってきた黒人奴隷の一人であり、Sam の父 Crawford が彼女に興味を持ったのも、Doom が自分に協力したら奴隷をやると言い出したからであった。また、その女性の夫が妻を守るために助けを乞うのも Doom であり、最終的に Crawford に罰を与え、Sam に “Had-Two-Fathers” という名前を付けたのも Doom である。このように、Sam の誕生の経緯と Doom は切っても切れない関係にある。

だが、Sam と Doom の関係は、さらに複雑なものである可能性がある。実は Doomこそ Sam の父親であるという解釈が早くから存在し、現在にいたるまで有力な説となっているのである。

この点に関する議論を簡単に振り返っておこう。まず 1967 年に Elmo Howell は Sam の父は Doom であると主張し、“to read the story in any other way is to overlook the moral meaning that Faulkner was trying to establish” と述べている。次いで 1974 年に、M. E. Bradford もやはり Sam の父は Doom であるとし、その根拠として Doom が Sam への名付けを行っていること、Doom が Sam を気に入っていること、Sam の誕生の時期、*Go Down, Moses* における記述の 4 つを挙げている。それに対し、同じ年に Lewis M. Dabney は *The Indians of Yoknapatawpha* のなかで、Doom は Sam の父ではなく、そのような説は *Go Down, Moses* に書かれてあることを “A Justice” に持ち込んだにすぎないと反論している。³⁾

以後、現在に至るまで、この問題については対立する二つの見解が並立し続けてきたように思われる。1994 年に出版された *Reader's Guide to the Short Stories of William Faulkner* においても、著者 Diane Brown Jones は “The question of Sam Fathers's paternity has provided one of the main issues of critical response to ‘A Justice,’ even though it would seem that the point of the narrative is to establish just that fact.” と述べた上で、結局は両論併記という形を取っている。⁴⁾

Sam は純粋な黒人ということになる。つまりもし Sam に父が二人いれば、彼は二つの人種に属してしまうのである。

そして、もし Quentin がこの話を無理に理解しようとしたすれば、彼はさらにありえないことを考えざるをえなかったはずである。それは Native American として生まれた子が黒人に変えられてしまったという途方もない考えである。もしそんなことがありえるのならば、人種というものは勝手につくりかえられるものになってしまう。これは南部に生まれた者にとって、どうしても認められないことであろう。このように、Sam の物語は南部社会の根底を揺さぶるような可能性を秘めていたのである。その意味でこの結びの箇所は、*Light in August* の Joe Christmas の物語を先取りするものと言えるであろう。

以上、Sam の物語の結びの部分を取り上げ、ユーモラスな調子の下にかくされた深刻な意味を検討してきた。先に述べたように、Sam の物語のブラックユーモア的な性格というのは定説であるが、この部分の持つ深刻な意味というものは、これまで指摘されてこなかったように思われる。²⁾ もちろん、これはあくまで隠された意味であり、しかも 12 歳の Quentin の子供らしい勘違いにすぎないといえすぎる。しかし、これは 12 歳の Quentin を聞き手にするという構成から必然的に生まれてきたものであり、その意味でこの短編の複雑な構成の成果のひとつである。

ところで、Sam の物語の深刻な意味といえば、族長 Doom に言及しないわけにはいかない。そこで、今度は Doom に焦点を当てながら、Sam の語る物語の意味をさらに考えてゆきたい。

2

族長の甥にすぎなかった Ikkemotubbe は、7 年の不在の後 Doom と名を変えて故郷に戻ると、族長とその息子を毒殺しその位を我がものとする。彼はすぐに暴君として君臨し、座礁していた汽船を引き揚げさせて自らの住まいとするなど、己の欲望のままに一族を支配する。このように、

びだと言ってもいいであろう。読者はこの部分を読んで一瞬当惑し、謎を解くことを強いられる。その時読者はもう語り手の話術に乗せられているのである。

もっとも、この「考えオチ」はそれほど効果的なものではない。その「謎」は容易に解けるものであり、ここで考え込む読者はほとんどいそうにない。それ以上に問題なのは、考えた末に見つけるはずの答えがあまりに平凡なことである。ではこの結びは、不発に終わったユーモアでしかないのだろうか。

だが、この物語の聞き手 Quentin は明らかにこの箇所を聞いて動揺している。とすれば、この結びの部分には Tall Tale 的な装いの下になにか深刻な意味が隠れているのであり、12歳の Quentin はそれを直感的に感じ取ったのである。では、Quentin はなぜそれほど動揺したのであるか。

その答えは、たった今述べた「考えオチ」の中にある。もし Quentin が謎を解けず、夫が差し出しているのが新しく生まれた子であることにどうしても気がつかなかったら、彼はどのようなことを考えたであろうか。その場合、Quentin はその子は Sam であると考えしかない。とすれば Sam を差し出している黒人の男が Sam の父ということになるであろう。だがそうであれば Sam には文字通り二人の父がいることになってしまう。おそらく、これこそ Quentin が考えたことである。子供が父を二人持つことが可能であれば、もはや父と子の絆は絶対的なものではない。そして一度父との絆が疑わしいものになってしまえば、祖父との絆はさらに信じがたいものになるであろう。この考えは祖父の庇護の下にいた12歳の Quentin をおびえさせるのに十分である。

だが、Quentin を動揺させたのはそれだけではない。ここにはまた人種に関する固定概念を覆すような意味が隠されており、それは Quentin を根本から揺さぶるのである。

というのは、もし Sam に二人の父がいることになったら、いったい Sam はどの人種に属するのであるか。黒人女性と Native American の男 Crawford との間に生まれたのであれば、Sam は混血であり、黒人とは一線を画する存在である。だが、もし黒人の男が Sam の父であれば、

の顛末であり、そこには奴隷制が暗い影を落としている。このことは、この短編の構成に関する上記の定説の述べるとおりである。

このような Sam の物語の複雑な性格は、その結びに端的に現れている。それは確かに Tall Tale のオチを成す punch line にあたる箇所なのであるが、それだけではすまない深刻な内容をはらんでいるのである。

‘This is a good fence,’ the nigger said. ‘Wait,’ he said. ‘I have something to show you.’ Herman Basket said he flew back over the fence again and went into the cabin and came back. Herman Basket said that he was carrying a new man and that he held the new man up so they [Herman and Crawford] could see it above the fence. ‘What do you think about this for color?’ he said.¹⁾

Sam の父は奴隷であった黒人女性との間に Sam をもうけた罰に、黒人夫婦の家の周囲に塀を作らされる。季節が変わり翌年の夏までかかってようやく塀が出来上がった時、夫は勝ち誇って赤ん坊を見せ、「この赤ん坊の色をどう思う?」と問いかけるのである。このセリフが結びの punch line になるのは、かつて夫がこれと同じ言葉を用いて Sam が自分の子ではないことを Doom に訴えているからである。つまり、この夫がかつて妻を寝とられたときの無念の言葉をそのまま用いて、今度は妻を取り戻したことを宣言しているからである。だがこれだけでは Tall Tale のオチとしては不十分であろう。この最後の問いかけがオチである以上、ここにはもっと隠された意味があるはずである。

それを発見するためのカギは、この夫のセリフ自体にある。単純なことだが、「この赤ん坊の色をどう思う?」という彼のセリフには、この赤ん坊が二番目の子であることを示す表現はなにも含まれていない。ということは、この部分を読んだ読者がこの赤ん坊を先に生まれた Sam だと考える可能性があるということである。また、引用した部分だけではなくその前後のどこをとっても、ここで夫が掲げているのが新たに生まれた子だと示すものは何もない。つまり、このセリフは一種の謎になっており、この結びは「考えオチ」なのである。その意味でこれはとても Tall Tale 的な結

いを考えてゆくことで、この短編の内側の入れ子構造の意味を検討してみたい。そしてその上で、あらためて Quentin に注目し、最終的には“A Justice”全体の構造的な読み直しを試みてみたい。では、手順としてまず Sam の物語から始めよう。

1

Sam Fathers が Quentin に語るのは、生まれたときに彼に付けられた“Had-Two-Fathers”という奇妙な名の由来である。それはまた、族長の甥にすぎなかった Ikkemotubbe が “Doom” と名を変えてニューオーリンズから戻り、族長の座を奪うまでの物語と切っても切れない関係にある。だが、ここでは Doom のことは後回しにし、まずは Sam の語る物語をそのまま受け入れて考えてゆきたい。それは概略次のような物語である。

Sam の父は “Crawford” という名の Native American だったが、族長 Doom が所有する奴隷のひとりである黒人女性に執着し、さまざまな手段を用いて彼女を黒人の夫から奪おうとする。夫の方は Doom に訴えて妻を守るのだが、その甲斐もなく妻は明らかに Native American の血を引く子供を生んでしまう。夫は Doom のもとに行き、妻を寝取った Crawford に正当な処罰を与えるよう求めるが、Doom はまずその子に “Had-Two-Fathers” という名前を付ける。これが Sam の奇妙な名前の由来である。そして Doom は Crawford が二度とその女性に近付けないよう、黒人夫婦の家の周りに塀を作る罰を命じる。その塀がやっと出来上がった時、夫は自分と妻との間に新たに生まれた子供を勝ち誇って見せるのである。

先に述べたように、この物語は子供の頃に聞いた Herman Basket の話を引用する形で、Sam が 12 歳の Quentin に話すものである。そして、その口調は淡々としており、深刻さはまったく感じられない。そのため、この話はほとんど Tall Tale となってしまう。だがそのような調子にもかかわらず、ここで語られているのは一人の女性をめぐる執拗な欲望

禁じられたノスタルジア

—— William Faulkner の “A Justice” について ——

金 澤 哲

“A Justice” は Faulkner の Native American を扱った4つの短編のひとつである。同時期に書かれたとされる “That Evening Sun” 同様、この短編は *The Sound and the Fury* の主要人物の一人である Quentin Compson によって語られているが、語りの構成はより複雑である。というのは、“That Evening Sun” の中心部分が9歳の Quentin が直接体験したことであるのに対し、“A Justice” の中心は12歳の Quentin が Sam Fathers から聞いたことなのである。さらに Sam の語る物語も彼が直接体験したことではなく、子供のころ父の友人 Herman Basket から聞いたものである。要するに、この短編は二重の入れ子構造をなしている。このような複雑な構成は Faulkner の短編の中でも例外的である。

この短編のこのような構成は早くから注目され、その効果についてはすでに一定の評価が確立している。それは Sam の語る物語のブラックユーモア的な性格を指摘した上で、それを理解できなかった子供の Quentin と現在の大人になった Quentin との間のアイロニカルな対照に注目し、そこに initiation の主題を見いだすというものである。この解釈自体は穏当であり、特に反論する必要はない。だが、枠組みとその中で語られることの対照から生じるアイロニィは、たとえば “That Evening Sun” にもあてはまることであり、これだけでは二重の入れ子構造という “A Justice” の特異な構造の説明としては不十分であろう。つまり、上記の解釈では外側の入れ子構造は説明できているものの、その中に存在するもうひとつの入れ子は無視されているのである。具体的には、Sam が Herman Basket の語りを引用しているという事実が全く考慮されていない。そこでこの小論では、語り手としての Sam に注目し、彼の語りの裏側に秘められた思